

平成30年度大阪府立難波支援学校
第三回学校運営協議会

1. 日時 平成31年3月14日（木） 13：30～14：40

2. 場所 大阪府立難波支援学校校長室

3. 次第

（1）開会

（2）学校経営計画について

「平成31年度学校経営計画」の方針説明

「キャリアプランニングマトリックス」の動画鑑賞（本校研修会にて活用済）

（3）学校教育自己診断について

「学校教育自己診断アンケート」等、別添資料に基づいて説明

「コース制授業」についての説明

（4）その他

「教員の授業その他の教育活動に関するご意見について」（意見書）

（5）閉会（校長挨拶、会長挨拶）

4. 協議内容（各委員からの主な意見）

◎学校経営計画について

- 平成31年度の学校経営計画は、今年度のものと比べてめざす学校像の視点が広く捉えられていると感じた。中期的目標は、学校のさらなる飛躍が感じられる。また、新学習指導要領をふまえつつ、キャリアプランニングマトリックスなどを進め、使用していく中で教育の中身を考えていこうというスタンスが明確に感じられた。しっかり使っていこうとしていることがよく分かる。また、学校行事では現状をふまえて改善しながら、魅力ある学校づくりをすすめていることもよく分かった。人権に関しても、地域関係諸機関のいろいろな意見を聞きながら理解を深めていることも理解できた。教職員に関しては、多様な工夫が感じられ、支援学校は若手が多い教員バランスの中、ミドルリーダーを育てていこうとする姿勢がよく分かった。
- 教員数が増えると会議や書類等が増えることが多いが、はたしてその必要性があるのか。会議等を少なくしようとする意識が、結果的には授業の充実につながる。障がいのある子どもを持つ親としては、教員の知識向上が授業の充実と安心につながる。子どもたちは段階を踏んで成長する訳ではなく、ときには停滞して、停滞している中で力を溜め込んで一気に成長するときもある。大人は「これができたら、次はこれ」と、どんどん求めてしまいがちで、それは子どもたちにはたいへんプレッシャーに感じるときもあるので、先生方はもっと正しい知識を持ってほしい。

- ・地域に開かれた教育がすすめられ、地域の障がい理解も深まっていると感じるが、親自身の障がい受容や理解はまだまだあると感じることも多いので、そのような保護者への足りない部分の支援も引き続き必要だと感じる。
- ・あえて“自立”と使わるのは良い。自立とは人の助けを借りない、ということではなく自分に必要な支援を受けながら、もっている能力を最大限に活かすことが教育の最大の目標である。中期的目標1の（4）では魅力ある行事について記載されているが、行事をこなすことを優先すると、子どもたちにとって行事が苦痛に感じられてしまう。行事の見直しや検討を行うときはキャリア教育の視点を大切にし、キャリア教育と言う大きな枠組みの中に行事を組み入れて行なうことが大切である。
- ・豊かさや幸せは求めるが、周りの支援は過度になりすぎず適切な支援で良い。行事は子どもたちが輝ける場所ではあるが、軽度の児童生徒ばかりが目立つものは良くない。どんなときも自分でできることは自分で、自分の力を最大限活かせる環境づくりが望まれる。

◎学校教育診断に関して

- ・児童生徒のアンケート結果に“学校が楽しい”という結果が多いことはとても良いことだと思う。
- ・校長がリーダーシップを發揮している、という評価数値が高いのはとてもすごいこと。反面、教職員同士の信頼関係の項目の数値が低い点は気になる。組織上の問題ではあるが、先生方の専門性の向上が改善に繋がると思われる。
- ・現在は働いているお母さんが多く、子どもに興味がないわけではないが、母自身が忙しく、参観ですらなかなか行けない保護者も多い。そのような保護者はP T A活動にも参加しない。ホームページの閲覧数が上がらないのは、中学も大学も同じ。そのような保護者は、わざわざ自分からホームページを見ることもない。ただ昨今は、送られてきたメール（携帯）は一番よく見ていると思われる。学校の情報を伝える手段としては（マチコミ等の）メールをより利用することはどうか。
- ・子どもは具体的な質問には答えられるが、抽象的な質問に答えることは難しい。もっと子どもたちがイメージしやすい質問が良いのでは。同じように保護者への質問項目も難しいものもあり、保護者の真意が聞き取りにくいものになっているかもしれない。アンケートは保護者の気持ちを伝える数少ない手段のため、もう少し工夫を。

◎意見書について

- ・「意見書」、今回はなし

◎その他

- ・中期的目標「安心安全な教育環境の整備」はこれからさらに大切。和歌山県みくまの支援学校の防災教育はかなり発達している。南海トラフなども懸念され、新宮という場所自体が災害が多い中、防災キャラを学校として設け、書く教室に持ち出し非常袋やヘルメットが各教室に配備されるなど意識も高い。ヘルメットがかぶれない子どものために、発泡スチロール製の自分で頭の上で持ってヘルメット代わりにする防災グッズもあり、子どもたち一人ひとりの特性に応じた防災教育もなされている。